

## 日本英語教育史学会 会報

294

2019 年 8 月 10 日

**HiSELT** Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562  
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室  
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191  
e-mail: membership@hiset.jp会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)  
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873  
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第273回研究例会報告

2019 (令和元) 年 7 月 20 日 (土), 専修大学サテライトキャンパス (川崎市多摩区) において第 273 回研究例会が開催されました。参加者は 35 名でした。

例会では 2 本の研究発表が行われました。はじめに, 川嶋正士氏 (日本大学) が「日本の英語検定教科書に見られる文分類の発達—「5 文型」断章 2019」というタイトルでお話しされました。続いて孫工季也氏 (和歌山市立西和中学校) を指定討論者に迎え, 「自著を語る」として森悟氏 (元高校教員) による「春水の晩年~松江における生き様~『評伝 佐川春水』を素材に」の発表が行われました。司会は河村和也氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますので参照ください (①は川嶋氏, ②は森氏及び孫工氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①第五文型の変遷について多岐にわたる変化があったことを知り, その歴史について無知ながら理解を深めさせてもらいました。教員や教育に関係する日本人が, なぜその五文型やその他の型をおさえた教育を推進したのかが気になりました。日本の受験が背景にありその当時の参考書が深く関係していることを知りました。そこでなぜ受験において五文型が重要視されたのかさらに深掘りして, 五文型の目的というものを知りたいと思いました。この目的の明確化をすることによって今後の日本英語教育に新たな視点が生まれると思いました。

(専修大学 齊藤航介)

◆①英語を勉強していながらも, 5 文型の起源やどのように根拠づけられているか, しっかり理解できておりませんでした。これまでは教科書や文法書で 5 文型を用いた英作文を練習していましたが, 今後はその仕組みについて更に理解を深めたいと思いました。 (手嶋里穂)

◆①5 文型という 1 つのトピックを英語学的視点からみるのか, もしくは英語教育学の視点からみるのかで論文の方向性が変わること気がされました。自身も卒業研究という課題に取り組んでおりますが, 上記のようにさまざまな視点を持つことが大切であると再確認できました。 (専大生)

◆①去年も文型に関する発表を聞いたが, その時は私自身の知識不足が大きく, あまり理解をすることができなかった。今年は去年に比べて理解できたところが増えた。その中で感じたことは, 学校文法と規範文法をどこまで教えるのか, そして教える差をどこまで広げる, もしくは小さくする必要があるのかである。学校では「学校文法」を教えることによって文法の定着をはかることができる一方で, 学んだ内容を実際に使用する場面は規範文法で学ぶと思うので, どこまで教えたら生徒・児童の関心が続くのか疑問に思った。 (菅原玲耶)

◆①私は中学3年生の時に初めて5文型を教わりました。それ以前までは、期末試験などのテストにおいて語句整序や空所補充の正答率が低く、読解においても正確に内容理解をすることができていませんでした。5文型を教わり、教科書の本文の文型をとらえるようになってからは、飛躍的に内容が理解できるようになり、語句整序や空所補充においても文型から推測することができるようになりました。この経験をきっかけに、英語や教育に興味を持つようになりました。5文型が全ての日本人EFL学習者にとって重要であるかどうかは個人差があると思いますが、質疑応答の際にお話がありましたように、日本語は動詞が最後に来るのに対し、英語は主語の後に動詞が来るという文構造の違いを理解した上で英語を学習することがとても重要であると感じています。その構造を理解する上で5文型を活用することにより、品詞の学習にも繋がるために英文の理解が容易になるのではないかと、自身の経験を振り返りながら改めて考えました。英語教育についてのある講義において「学校ではもう5文型を教えない(教えてはいけない)」という話を聞いたことがあります。文の構造を意識させることは日本人EFL学習者にとって理解を助ける大切な役割を担っているのではないかと改めて感じることでできたお話でした。思い入れのある5文型の歴史について学ぶことができ大変嬉しかったです。貴重なお話をありがとうございました。(岩崎七夏)

◆①私ももちろん英語は第5文型から成っていると思っていました。実際に第5文型で暗記するように英語学習をしているのは日本だけと知り驚きでした。また5文型だけでなく25, 38の文型があったということも驚きでした。

(石井佑弥)

◆①今まで当たり前のように関わってきた第五文型がはじめから今の型ではなかったことに驚きを感じました。当たり前を当たり前でな

いと思えるような、またそのギャップを「なぜ?」と追求できるような人間になりたいと思いました。(興石伊那帆)

◆①私自身、5文型を学んだ際には暗記しろ、O=Cなど。だが今回のお話を聞いて思ったことは、5文型を教える、学ぶ際にはおろそかにしてはいけないと思った。(竹下亮寛)

◆①「5文型」というと、学校での授業風景を思い浮かべるほどのものだがそれをここまで調査されている川嶋先生は素晴らしい方だと感じました。普段、何気なく見過ごしていることでも、立ち止まって考えてみるという姿勢を持つことを先生の発表から感じました。

(seventh-dan)

◆①私も高校生時代に5つの文型をカテゴリーに区分し、また第一文型はSVといった具合に順序も決まっているという理由がわからず当時は理解に苦しみました。さらにそれがテストの問題に出題すると担当教師に言われ、必死に暗記したのを思い出しました。

川嶋先生がご指摘された文型のTypeが私達が一般的に知られている(I)SV, (II)SVC, (III)SVO, (IV)SVOO, (V)SVOCの他に用例や分析として用いられる順序が存在するというお話は私にとってとても印象深く思えType Aと順序で記名しないと点数が取れなかったあの高校時代のテストがますます不思議に思われました。(竜野公佑)

◆①文分類における明治から現代までの歴史の変遷について、学校文法の観点からこれまでの英語教育に問題意識を持つ良い機会となった。形式ばったように捉えられがちな「5文型」の意義とは何なのか。学習者の立場からして、いわゆる学校文法は効果的なものであるのか。教育上の文法指導の在り方を今一度考えさせられる場面が何度もあった。英語学習者である者として、浅はかな見解ではあっても、自分なりの答えを持っておきたいと思う。

(bro-taro-world)

◆①英語を学習する上で基礎となる 5 文型について、その発展過程や歴史を詳細に聞くことができ非常に勉強になった。ご質問でもあったように、5 文型を英語学的、英語教育学的、言語学的に多方面から考えることができることがわかった。(匿名希望)

◆②佐川春水・洋さんの生涯を見返すことによって、今の英語教員の求められている能力や理想の教師像がどんなものなのかを考えさせられる時間になりました。私たち学生にとっても理解しやすいように佐川春水さんの歴史を語って下さったおかげで、英語教育に携わっていく人間には必ず歴史の知識が必要で、先人を踏襲すること、成功者を学ねぶことが第一歩であると強く感じました。(専修大学 齊藤航介)

◆②佐川春水の人物史に関して本格的に入り込んだのは今日が初めてでした。通して人物史を辿ることで一つの学問分野が成り立っているということを実感しました。(興石伊那帆)

◆②佐川春水さんはアメリカ人にもその英語力を褒められる程であったと知り、佐川さんに近づきたいと思いました。晩年を知り、素晴らしい生涯を過ごされた佐川春水さんのことを詳しく知れて、非常に興味深かったです。

(手嶋里穂)

◆②佐川春水の英語を愛し、教育に専念した生き様を知ることができ、自分のこれからの生き方に取り入れていきたい部分をみつけることができた。“雨人”や“頂先生”，息子の“洋”など、春水のネーミングセンスの秀逸さを感じることができた。春水の用意周到さや勤勉さ、英借文という学習の仕方を是非取り入れていきたいと思った。(匿名希望)

◆②教員を目指す上で、佐川春水という人物が行った教授法や、生徒の実態をつかむやり方は学ぶものが多いと感じた。今日のお話の中で「正しさ」という言葉もあった。どれだけ英語を正しく使用できるか、運用できるかは、まず先生の知識力次第であると思う。大学の講義が

つねに人であふれているというのは、佐川春水という人物が好かれているから以外にも、知識が豊富であったためだと思う。(菅原玲耶)

◆②佐川春水さんの「勤勉さ」「用意周到さ」は自分にはまだない力であると思いました。学生に授業をするとき、NHK で収録をするときなど完璧に仕事するためには下準備が一番大切であると感じました。また、大学の講師として自分の能力をさらすのではなく、自分の英語知識・授業方法を工夫して、いかに学生に英語を学んでもらうか、身につけてもらうかを常に考えていた人だと思いました。(専大生)

◆②佐川春水という人物は田邊祐司先生のお話の中で度々伺っていて、様々な分野に造詣が深い中、英語教育に従事したことで名を轟かせたという逸話に触れ、改めて偉大な方であったと感じました。特に島根大学で教授されていた時分にはノートを左右対称にし、左に英語のイディオム・語句を書かせ、右では日本語を書いてどちらも英語に運用可能な“英借文”の方法を提示していました。その点で、英語にとっつきやすい教授法(訳読に近い)を採用し、より多くの日本人に英語を知って頂くきっかけを英文英訳ではない方法で取り入れた事からも、日本的英語教授法をやがて飛び立つための基礎力をつけるため模索していたのかなと感じました。(竜野公佑)

◆②春水についての歴史や生き様を語り調子で、時には笑いを交えながら発表していただき、終始話にのめりこんでしまった。特に今回の発表でこれからの自分にプラスになる点は「英借文」の利用である。ネイティブ(英語)の人々が実際に使う英語を自分用に変えて用いることが最も英語上達に導く方法であると私も今日感じる事ができたので実際にこれから試してみたいと思う。(須田浩亮)

◆②佐川春水先生の英語に対する姿勢や考えを森先生の貴重なお話から学ぶことができました。(Seventh-dan)

◆②佐川春水という名は聞いたことがある程度だったのですが、どのような人物であったのか、ダジャレを組み込みながら授業を行っていたなど、細かいエピソードまで聞くことができるとても身になりました。(中川千鶴)

◆②佐川春水という人間について今まで深く知りませんでした。俳句については知っていましたが、英語についてもすごい人だとは知りませんでした。英語を教える時は現在の生徒中心の授業とは違い、春水自身が前で話し続ける劇場型の授業をしていた。このような形式でも授業が進んでいくほど春水の話に生徒を惹きつ

ける力があつたと言わざるをえません。自分が教師になったときには生徒を中心に置きつつもそれほどに生徒を惹きつけられればいいと思いました。(石井佑弥)

◆②佐川春水の偉大さが伝わってくる発表でした。特に印象に残ったことは「誤りを認めて、改める」というフレーズです。あ、これは自分のことにあてはまると思いました。誤りを認めることはできますが、改めるところまでは達していません。春水は改め続けてきたからこそ偉大な人になったのではないかと思います。

(竹下亮寛)

### <発表を終えて>

川嶋 正士 (日本大学)

今回は、発表の機会を与えていただき、ありがとうございました。2013年に入会をお認めいただき、2015年よりタイトルに「5文型」断章」とつけて毎年発表をする機会を与えてくださったことにも感謝いたします。発表を積み重ねることで、問題意識も継続し、研究も進化したように感じます。今回は、特に多くの方々にお話を聞いていただけ、うれしく存じます。フロアからいただいた質問を、新たな研究疑問に練りこみながら今後も研究を続けていきたいと存じます。

この機会に前回の発表について拝田先生よりいただいた感想(日本英語教育史学会会報(288): [http://hiset.jp/kaiho\\_bn/kaiho288.pdf](http://hiset.jp/kaiho_bn/kaiho288.pdf) p.4)へのリプライを行ったものを掲載させていただきます。昨年内々にコメントをいただいた翌日にリプライをしたのですが、会報には、コメントへのリプライは掲載されません。ゆえに、感想の一部として掲載させていただきます。リプライの中で実名で触れていた方を匿名にし、Referencesをつけた以外は、1か所の助詞の誤植を除いては改編していません。これを機会に翌号以降でも結構ですので、感想に関するリプライの掲載など、この学会での研究がより活発になる機会が設けられることを望みます。

拝田 清先生 (以下私信部分省略)

いただいたコメントと質問に対して、せっかくでするので補足を含め述べさせていただきます。話の枕で20分かかってしまったのですが、「5文型研究」の over all architecture を語ったうえで本発表に臨んだ方が視野狭窄に陥らずに済むと思いました。おかげで、貴重なコメントをいただきました。

以下、コメントに対するリプライを含め、私の知る限り、考える限りについて述べさせていただきます。



## コメント①

私の数多ある欠陥の一つに、英語教育が本業でないことがあります。教員として中学・高校で教えたことがないばかりか、教員免許も持って居ません（間違っても先生にだけはなるまいと思って居ましたので（笑））。ゆえに現場のことをあまり理解しないで英語学方面から研究を進めるきらいがあります。現場の先生方に大規模な調査を行いたいと考えていますが、実現しません。限られた機会に現場の先生に伺った経験から、現在指導要領から「文型」という用語が消滅したにもかかわらず、「5 文型」を積極的に教えらる先生が少なからず見受けられることは存じています。しかし、「5 文型」を積極的に教えらる先生方は各々の方法論と意図で教えており、「5 文型」を用いた英語教育という統一された方法論は確立されていないように感じます。

「5 文型」の記述力に関しては、Onions 自身がこの 5 形式で「大体の英文」がカバーできるといっています。故に「5 文型」を用いた分類はスタンダードな文に限られるべきで、*'There is someone wants to see you.'* の様な文が説明できないことを「5 文型」の記述力の欠陥であるという様な指摘はお門違いであると思います。

以下、私の隠し玉を。詳細なデータは未だ分析できていませんが、,

参考書の類を見ていると、昭和 10 年くらいには文法書のほとんどに「5 文型」が見られます。此の頃より英作文や英文解釈の参考書や問題集の初めに「5 文型」がみられるようになります。文法項目としてだけでなく、拝田先生がおっしゃるように、英作文や解釈における運用力を高めるうえで、分類の基本としての扱い勝手がいいと考えられるようになったことが「5 文型」定着の一要因であったと考えられます。この意味で拝田先生が指摘される「分節化」の一手段としての位置づけは正しいように思えます。

但し、学年配置については初級者というよりは、或程度英語が定着した後に教えらるようです。大正末期より「5 文型」が文法書で紹介されるのは中学校の 3 年次以降のことが多くみられます。戦後の新制になっても中学 3 年か高校 1 年の教科書に見られる場合がほとんどです。中学校 1 年ではまずは綴り字と音読から初めて、或程度の文法を習った後に帰納法的に整理するという考えでしょう。

## コメント②

まずは、興味深い点が 2 つあります。1 つは、韓国や台湾に於いて戦時中まで日本式の教育を受けているとすれば、教科書にも「5 文型」がみられるはずであり、当時の学生は「5 文型」を習っていたという事になります。これが戦後、日本の支配を離れて独自の英語教育を施すようになった時にどのように発展・解消・発展的解消を遂げたのかという点です。それぞれの国の英語力の測定が正しくなされ、「5 文型」学習との因果関係が分かれば、「5 文型」の有効性を検証する手立てとなります。いつになるやら予想もつきませんが、今抱えている RQ をやっつけたら取り組みたい問題です。（どなたかやってくださればうれしすぎます。）

2 点目は、海外における「5 文型」の痕跡です。Parallel Grammar Series は戦後まで版を重ねました。Sonnenschein 研究の第 1 人者である John Walmsley が p.c. で教えてくれたのですが、彼の友人が 1950 年代半ばに英国の Grammar School で Parallel Grammar Series のドイツ語文法書を使って授業を受けたといっています。発表資料にもある通り、この文法書の統語論の最初

は **Five Forms of the Predicate** から始まります。という事は其の教室の学生は英語ではなくとも「5 文型」に触れたこととなります。これらを踏まえて **reply** させていただきます。

まず、韓国の下りはとても興味深いので実際に検証させていただきたいと存じます。

国際会議で「5 文型」を説明したり、日本人以外の文法理論研究者に「5 文型」の話をする初めは各国の人から **'It's not new to me.'** という反応があります。しかし、よく聞いてみると「5 文型」は習っていません。**'Transitive/Intransitive'** の区別のもとに **'object, indirect object'** 等を使って統語分析をすることを習っているだけで、日本で見るとような **"Five Forms"** を用いた指導と云うのではないようです。

因に生成文法家たちに **SVC, SVOC** という文で **'complement'** という用語が用いられて居るといって、彼等は腰を抜かさんばかりに驚き、呆れます。ただし、英国の文法家は後述する **Quirk et al. (1985)** を始め、日本の学習文法と同じ定義で **'complement'** という用語を用います。

拝田先生が御覧になった事実は **'SVOC'** という用語により、ある種の文の分類をしているという事でしょうか、それとも日本式の「5 文型」の一環と位置付けて教えて居る事でしょうか。興味があります。ビデオをいただければ韓国人の学生と眺め、つぶさに検証させていただきたいと存じます。

また私が考える狭義の 5 文型の定義は **'SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC'** の順に第 1~第 5 文型と配置されて居るものです。戦前の文法書は「5 種の文型」を紹介するものの、配置は様々でした。第 4 文型の位置に **'SVOO'** を配置するものも多く見られました。5 月に広島で 70 歳過ぎのご年配の先生に伺ったところ「**SVOO** は第 4 文型」という習い方をして、ご自身もそう教えていたそうです。

不在の証明は困難を伴いますが、反証となりうるものがあれば、是非お知らせください。本学部の韓国、台湾、中国からの留学生は「5 文型」と言うものを習った経験はないようです。理事の先生方が留学生と触れる機会があれば、聞いてもらえますか。彼らが使用している教科書や参考書に「5 文型」が見られると私のものの言い方も変わってきます。

## 質問

これには 2 種の回答があります。私の代案は、あくまで「5 文型」の代替モデルです。文を 5 種に分類することを前提としています。この観点から述べると味気ない答えですが、例文は **SVO** という事となります。「5 文型」の噴飯物の例として **'He gave me chocolate'** は **'SVOO'** で **'He gave chocolate to me'** は **SVO** であるという分析があげられます。しかし、原点に戻ると「5 文型」は形式的分析ですので、前置詞が付いた部分は凡て句としての扱いを受け、名詞として処理できなくなるのであり、この処置が正しいこととなります。高校生以下に「5 文型」を教えるのであれば、まずは形式的分類の手段としてこれを徹底させるのが良いと思います。英語が上達するか、定かではありませんが。

文型の数を問題にするならば **Quirk et al. (1985)** が提唱する日本で所謂「7 文型」というものがあります。日本では、之と「5 文型」を比較することが良くありますが、**Quirk et al.** は「5 文型」の代案として「7 文型」を提唱してはおりません。その参考文献にもどこにも **Sonnenschein/Onions** に言及する箇所はありません。これを用いて文法を教える先生もいるようですが、(a) これまで「5 文型」に触れた学生にとってパラダイムが変わるのは負担、(b) 句の扱

いに対して、意味の上から判断を迫るのは困難（実際に NVN の構文で SVC と SVO を正しく区別できない学生も多い）等の理由からお勧めできません。

新たな提案をするならば発表でも述べた 1 項述語である SV/SVC と 2 項述語の SVO/SVOC を基本とし残りは 3 項述語としてすべて統一的に扱うという提案も考えられます。（上述の He gave me chocolate/He gave chocolate to me/ She put an envelope on the table,,

なお、Fowler (1926) は complement の定義を 4 種挙げ、日本の学校文法に見られる SVC/SVOC に当たるものが最も標準的としながら、第 4 の「きちんと定義できれば役に立つ」という分類法でこの文における ‘on the table’ は adjunct で ‘She put everything in order.’ における ‘in order’ は complement とするという分類も紹介しています。）これは形式ではなく項構造 (argument structure) による意味論的分析が入ります (Jackendoff (1990), Grimshaw (1992) に始まるもの)。

この場合、現場の先生に注意してもらわなければならないことがあります。SVOO は SVO + phrase の異体であるというのは困ります。（英語史や文法理論を押さえずに我流で教えられる方の中で、斯の方便を「思いつく」ひとがいるようです。）この教え方をすると predicate logic とは異なった意味で SVOO を例外扱いできるのですが、英語の事実と反します。古英語には与格があり SVOO が存在しました。これが、屈折が減少して中英語のある時期より「格の水平化 (leveling)」という現象が発生し He gave chocolate to me. の様な文が生まれます。学習の現場には方便も必要ですが、やはり「嘘はつかない」というスタンスは崩してはいけないと考えます。

以上、拝田先生の貴重なコメントと質問にかこつけて放言・妄言を述べさせていただきました。このような学恩を受けられることが、学会に所属している意義であると存じます。拝田先生には多謝です。「5 文型」は習わない人や教えない人がいない文法項目であるにもかかわらず、記述力は英語教育における有効性などの狭い領域に限って議論され、文法理論や史的検証が怠られていたくらいがあります。皆様もどうぞ色々教えてください。

（『英語青年』の記載を 100 年分入力しているうちに laptop の変換が変な学習をしているようです。時折変な漢字を見て笑ってください。細江逸記と縁が切れるまで、このままの変換にしておこうと思って居ます。）

## References

- Fowler, Henry Watson. *Modern English Usage (Second Edition)*. Oxford: Oxford University Press, 1983. (1st Edition 1926).
- Grimshaw, Jane. *Argument Structure*. Cambridge: MIT Press, 1992.
- Jackendoff, Ray. *Semantic Structures*. Cambridge: MIT Press, 1990.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman, 1985.

## &lt; 発表を終えて &gt;

森 悟 (元高校教員)



佐川春水といえば明治・大正・昭和の英語教育をリードした英学の巨人である。しかし東京における正則英語学校や日進英語学校での活躍は有名であるが、終戦後の生活については意外なほど知られていない。今回、拙著『評伝 佐川春水』を素材に日本英語教育史学会の例会で春水の晩年、特に松江での生き様について語る機会を提供していただいたことは何よりも幸せなことであった。

学校を失くし、自宅も空襲で焼かれ、失意のまま帰郷した春水であったが、終戦を迎えると次々に活躍の場が与えられていく。そして春水の人生は再び輝き始め、多くの人々に影響を与えていくのである。

進駐軍、「ラジオ俳壇」、島根大学での講義、そして死にいたるまでの経緯を関係者の証言も交え、私は丁寧にお話したつもりである。さらに息子である佐川洋についても、文字にできなかった部分も含め、多くのことをお伝えできたと思っている。

斎藤秀三郎に比べ、春水には未開拓の部分がまだ多く残っている。今回の発表が契機となり、春水研究がさらに深まっていけば、それは私にとって望外の喜びであると同時に、日本の英語教育史にとっても有意義なことであると確信している。

## &lt; 発表を終えて &gt;

孫工 季也 (和歌山市立西和中学校)



この度、僭越ながら指定討論者を務めさせていただきました。森先生のご発表は私のような英語教育史の素人にでもわかりやすく、また先生のお言葉を通じ、「名教師」であり、「人間」であった佐川春水の英語教育観及び人生観をより一層深く知ることができました。

著書の中では、「英米人になるために英語を勉強するのではない」という春水の言葉が記されています。私自身、教壇に立ち生徒を相手にしていますが、多忙のあまり、自分が何のために英語を教えているのかという問いを見失ってしまうことがあります。

現代の日本の英語教育はグローバル人材を育成しようと躍起になっています。「『人』を『材』と捉えるとは何事か。」と春水ならば一喝を与えたかもしれません。

春水が初めて教壇に立った時に板書した言葉が「一外国語に通ずるは一新世界を発見するにひとし」でした。

春水がつくった歴史の上を生きる者として、一人でも多くの生徒の「世界」を広げられるよう、頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、このような重役を与えて下さった諸先生方、取り留めのない質問に対しても真摯にお答えいただいた森先生、本当に有難うございました。



## >> 事務局より

### >> 事務局の「夏休み」について

夏季休暇および職務専念免除を申請し、9月4日(水)までは学会の事務局を置いている研究室を不在にしております。まことに勝手ながら、この間、事務局の業務は電子メールで対応できるものに限らせていただきたく存じております。郵便・電話・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は9月5日(木)以降となりますので、どうぞご了承ください。

### >> 年会費の納入について

年会費の納入につきましては、これまでに多くのみなさまにご協力いただいております。ここに厚くお礼申し上げます。なお、所属機関等を宛名とする領収証がお入り用の方は事務局にご連絡ください。

特に期限は設けておりませんが、未納のみなさまにおかれましては、以下の文書をご確認のうえ早期のお手続きをお願い申し上げます。

#### (1) 全国大会にお越しになった方：

大会当日に「紀要の配付と年会費の納入について」をお渡ししております。

#### (2) 全国大会にお越しになれなかった方：

6月15日付けで紀要および会員名簿とともに「紀要の送付と年会費の納入について」をお送りしております。

#### (3) 昨年度までに会費に未納分があるみなさま：

6月15日付けで「会員納入のお願い」のみをお送りしております。紀要と会員名簿はお送りしていません。

## >> 『日本英語教育史研究』第35号投稿論文の募集(再掲)

『日本英語教育史研究』第35号投稿論文募集中(締め切りは9月30日)。詳しくは学会ウェブサイト ([www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)) をご覧ください。

## >> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第274回研究例会 2019年9月21日(土) 広島で開催予定
- ◆ 第275回研究例会 2019年11月16日(土) 京都で開催予定
- ◆ 第276回研究例会 2020年1月11日(土) 東京で開催予定
- ◆ 第277回研究例会 2020年3月21日(土) 京都で開催予定

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要(100~200字程度)、(4) 使用予定機器、以上の4点を明記の上、発表希望月の3ヶ月前の10日(1月発表希望であれば10月10日)までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: [reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp)

## 日本英語教育史学会 第 274 回 研究例会

日 時： 2019 年 9 月 21 日 (土) 14:00～17:00  
場 所： サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター)  
(広島市中区大手町 1-5-3)

## 研究発表①

## 新制中学校・高等学校発足時の岡山県中学校・高等学校における英語教員の実態

山田 昌宏 (日本英語教育史学会会員)

【概要】戦後、昭和 22 年に新制中学校、昭和 23 年に新制高等学校が発足した。旧制中学校を母体にした新制高校はともかく、新制中学校においては、特に英語の教員確保には苦勞したと聞いている。「昭和 23 年度岡山県学事関係職員録」を基に、教員数、男女比、担当教科数、担当他教科、担当者職名、年齢、養成機関についてその実態を明らかにしたい。また、可能な項目については、「平成 28 年度岡山県教育関係職員録」から、平成 28 年度のものと比較してみたい。

## 研究発表②

## 明治後期の文部省留学生の生活について：

## 『杉森此馬英国留学日記 明治 37 年 1 月 1 日－12 月 31 日』を素材として

提案者：安部 規子 (久留米工業高等専門学校)

指定討論者：上野 舞斗 (関西大学大学院博士課程)

【概要】杉森此馬は広島高等師範学校在任中、文部省留学生として 2 年間英国及び米国に派遣された。帰朝後は英語音声指導を中心として日本の英語教員養成や英語教育の発展に大いに貢献した。本書は、英国への渡航中であった明治 37 年 1 月 1 日からロンドン及びオックスフォードに滞在した 12 月 31 日までの本人の日記を翻刻・翻訳し、解説を加えたものである。日記からは、当時の留学生の心境、生活の実際、オックスフォード大学での聴講の様子、日露戦争中という時代背景での日本人と現地の人々、また日本人同士の交流を知ることができる。

参加費：無料

問合せ：日本英語教育史学会例会担当 ([reikai@hiset.jp](mailto:reikai@hiset.jp))

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

## 【会場案内】

(県立広島大学のウェブサイト「アクセスマップ」)

(http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/satellite/accessmap.html) より)



【交通案内】

◆JR 広島駅から

路面電車で約 20 分，バスで 15 分，車で 15 分

◇路面電車（広島電鉄）の場合

広島港行 「本通り」下車，徒歩約 5 分

西広島行，江波行，宮島行 「紙屋町西」下車，徒歩約 3 分

◆広島バスセンターから

徒歩 3 分

◆広島空港から

リムジンバス（広島バスセンター行き）約 60 分

**EDITOR'S BOX** 個人的に応援している広島カープについての話です。今季はスタートでつまずき，優勝は厳しいと思っていたところ，5月に復活して大きく勝ち越しました。独走状態に入り，セ・リーグ4連覇も堅いと安心していたら，6月はセパ交流戦をきっかけに大失速。5位まで落ち，今季はAクラス入りも絶望的かと思っていたら，最近また調子を上げてきて，今（8月9日現在）は3チームが2ゲーム差以内にいる大混戦になっています。これだけハラハラドキドキのシーズンはファンになって初めてです。（若）